

2015年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
基準Ⅱ 教育課程と学生支援				
A 教育課程				
1 2015年度 of 主な教育活動	・教育活動の学年暦をもとに			
2 教育課程編成・実施の方針	・コース制	<p>3つのコースからなる専門ゼミナールでは、コースとしての特色を見直し、理解ある地域との連携のもと、充実した教育活動が展開できた。その成果を卒業レポートや要旨集にまとめ、保育フォーラムにおいては各コース共、特色ある内容の発表ができた。桐が丘幼稚園児との合同観劇鑑賞会では、幼児と共に素朴な演出の中にも、プロの劇団の演技に感動を覚え、改めて文化意識・幼児理解を深めることができた。</p>	<p>基礎ゼミでの学びが専門ゼミ活動に反映されるよう、さらに教員同士の連携を密にする。また、学生自身が自己課題を常に意識し、意欲的に研究に臨めるよう日頃からのきめ細かやかな支援に努め、各コースの専門性を身に付けた学生の育成に尽力する。更に、学びをレポート化する際の「書く力」に特化し、個別指導を定期的に行う。</p>	
4 学習成果の査定	・実習生の保健・安全	<p>実習委員会を月1回開催し、各実習指導担当が共通理解することや問題点について話し合い、指導内容についても確認しあうことができた。また実習指導書の内容について再検討をし、課題点をみつけることができた。</p> <p>実習中における保健・安全面について、風疹の予防接種義務や暴風警報発令時における学生への対応を他学科とも共通理解し対応を明確化した。</p> <p>実習交流会ではそれぞれの立場で個々の学生が学ぶ視点を明確にできた。1年生は実習記録のとり方や現場の保育者とのかかわり方などの具体的な話を聞き不安感を少なくし、2年生は他の学生からの体験談を聞き、視野が広まったという効果があった。</p>	<p>実習指導書の内容について保健・安全面の記載事項を変更した。学生や実習園に周知していく必要がある。</p> <p>実習園の巡回をする中で、基本的な挨拶・コミュニケーション・日誌の記録の不備などの指摘が多い。個人差は大きい実習に臨むための基本的な姿勢として、継続してきめ細やかに指導していく必要がある。</p> <p>実習交流会の準備・内容の進め方について学生主体の行事になるように変えていく必要がある。</p>	

5 学生の卒業後評価	・現場ニーズの把握	2015年度は未実施。		
B 学生支援				
1 学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用		2015年度は未実施。		
2 学習成果獲得に向けた組織的学習支援	・初年次教育	2015年度は、保育者として人にかかわる職業に就くために必要な「基礎・基本となる学習能力の習得」と「充実した生活設計能力の定着」を目標に初年次教育を実施した。学生自らが自身の課題に気づき、問題解決力を養い、実施による振り返りの仕組みを、1年生ゼミの時間で構築をするよう努めた。入学後まもない時期での新入生研修による学ぶ意義や仲間づくり、教育実習による学ぶ目標の明確化、基礎学力の見直し等により、自己課題を明確にし、その改善を積極的に行っていた。自分自身を知ることにより、他者理解が深まり保育士を目指す学生として望ましい姿が見受けられた。	入学時において、高等教育での学びの一層の自覚を持つ必要性が感じられる。また、実習先から身に付けて欲しい力として「文章を読む・文章を書く・人とコミュニケーションを取る・正しい日本語で話をする」等、明確に示されていることから、取り組みの一層の充実を図らなければならない。また、幼児教育学科全体として学生個々が持つ課題について、更なる細やかな対応の必要がある。	
	・新入生研修	2015年度より、1年生基礎ゼミナールにおいて、学生のコミュニケーション能力を高め、大学生活への早期適応を図ることを目的に入学当初に新入生研修を実施した。本年度は4月15日に行った。研修先は郡上市八幡町総合文化センター及び同市大和町古今伝授の里であった。主な研修内容は、①「郡上市の子育て」についての講演（郡上市総合文化センター）、②ゼミ活動、③「うたを通じたコミュニケーション」についての講演（古今伝授の里）であった。②についてはグループディスカッション形式で実施した。また自然を散策しながら、学生、教員が交流し、新しい学生生活の、より良い第一歩を築く成果をあげた。	2014年度までの宿泊研修での課題（時間割上1泊2日の実施が年々厳しく、特に資格取得に関わる授業の振り替えの困難さに直面するため、宿泊研修実施が可能かどうかを含め、同研修について検討）は日帰りの実施により、解消された。また本学が取り組みを開始している地域連携推進事業の対象地域（関市・美濃市・郡上市）を踏まえた検討をし、2015年度は1日の行程で郡上市（地域連携協定市のひとつ）で研修を実施することも達成された。今後日程について、反省として、限られた時間内での研修内容についてあらためて整理し、時間的余裕をうみだすプログラムを組むことが課題である。	

<p>・1・2年ゼミナール検討会</p>	<p>ゼミ運営委員会という名称にて実施しており、本年度は、新入生研修、来年度のゼミの教員配置および実施体制、基礎ゼミ・専門ゼミの内容および開講時間割、保育フォーラムの実施について検討を行った。特に来年度のゼミ教員配置については、各教員の特性に応じて基礎ゼミ-専門ゼミ間で2名を入れ替えることとした。また、ゼミの内容として、基礎ゼミでは「5つのあそび、初年次教育、見学実習」の3つを大きな柱とし、専門ゼミでは「卒業研究ポート」を後期の柱、そしてその「中間報告」を前期の柱とする方針を決定した。</p>	<p>ゼミ運営委員会代表の不手際により、2015年度は4回の開催に留まった。十分な検討を重ねたとは言いがたい状況だったため、2016年度は定期的に開催することを大前提としたい。また、ゼミは学生対応の中心的な役割を果たすため、1年生には大学生活への対応等、2年生には就職活動等について十分なサポート体制が整えられるよう、継続的に検討を行いたい。</p>	
<p>・教職実践演習の充実化会議</p>	<p>本年度から「保育・教職実践演習」と名称変更を行った。外部講師の選定については年度当初2年生ゼミ担当者会議において、教職実践演習の授業内容に合わせた形で検討、実施した。</p>	<p>学修内容については担当者が変更されたこともあり、年度当初からゼミ担当者会議にて引き続き検討する。</p>	
<p>・ボランティア活動</p>	<p>本学科の学生は、地域における多くのイベント活動に参加して成果をあげている。ボランティア活動の内容によっては、事前に製作等の準備が必要な場合や、ボランティア参加学生のためにスクールバス運行の手配が必要となることがある。そのため、今年度は、ボランティアにおける製作費用およびバス運行代等の予算を学科予算に組み込んだ。さらに、学内外の助成事業の予算を獲得できるように努めた。学生のボランティア活動への参加は、学習成果の獲得のみならず就職に結びつく実績も残されている。なお、学生が参加したボランティア活動については、資料参照とする。</p>	<p>学生の地域でのボランティア活動について、学内の地域貢献事業助成を2件獲得し活動を実施した。今後さらに、本学科で学んだ専門知識や技術を活用して充実した地域での活動を行うための予算の獲得に努めていくことが望ましい。</p>	

	<p>・保育フォーラムの充実</p>	<p>毎年1月第4土曜日に保育フォーラムを開催している。本年度は2016年1月23日に開催した。1年ゼミでは1年間の活動を代表者が発表した。2年生は昨年度の反省を踏まえ、3コースそれぞれ1ゼミの発表とした。その後、卒業生と在學生との交流会を開催した。先輩の社会人から専門職の意義や大学在籍期間の学修の重要性について直接話を聞くことで、在學生は学びの意義をより強固にしている。また、卒業生にとっては、社会人としての自らの1年間を省察し、仕事に自信と誇りをもつ機会ともなっている。</p> <p>本年度は学生の主導で保育フォーラム全体を運営する事ができた。それぞれの発表に対する講評、グループ交流会も学生の積極的な運営による事ができた。</p>	<p>今年度で6回目の実施となり、本学科の行事として定着しつつある。2006年度以降の卒業生17名が、在學生との交流会に出席した。約10年前までの卒業生に案内を送したが、毎年卒業生の協力を得ることに苦戦している。卒業生への広報をより積極的に行う必要がある。</p> <p>次年度は、保育フォーラム企画の段階から学生も参加させ、準備を進めていくようにしたい。</p> <p>本フォーラムは、卒後1年目を含めて、保育者の育成を保証するという意図から開催してきた。本会を形骸化させないためにも、卒業生と在學生との交流時間の設定を優先させる必要がある。</p>	
<p>3 学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援</p>		<p>2015年度も充実した学生生活支援を目指し、学科会議において学生の授業欠席回数を確認、気になる学生の早期発見を学科として共通理解することが出来た。また、ゼミ教員が細部に気を配り家庭と連携を取りながら指導を進めた。その結果が学科での退学者が年間2名と減少させることにつながったのではないかと推察される。</p> <p>また、本年度も前期基礎ゼミナール時に性教育について、外部講師を招いて講演を聴くことができ、命の大切さを通して自分自身も見つめ直すことができた。</p>	<p>2015年度まで、1年生を対象に、入学直後に学生支援委員会（学生相談委員会）より、ウェルネスチェックおよび面談が実施されていた。このことにより、問題を抱える学生の早期発見が可能となっていたが、面談時間が極めて短いことや、他学科の教員が担当することもあり、見直されることとなった。今後はウェルネスチェックのみ実施し、その後相談希望の学生を丁寧に拾い上げ、相談員等につなげる具体的方法を改善し、よりきめ細やかな学生支援の在り方を課題とされる。</p>	

4 進路支援		<p>学生は入学時・進級時にキャリア支援センターからの就職・進学ガイダンスを受け、一人ひとりが進路について考える機会を持っている。また、キャリア支援センターは「仕事と人生」の講義や公務員対策講座への参加を促し、2年次5月には、センター職員による個人面談と就職ガイダンス、各仕事相談会の案内、メール登録による就職情報発信を行った。その結果、2015年度は公務員合格者が8名となり、学生の希望がかなえられる就職となりつつある。ゼミ担当教員、キャリア支援委員、学科長、キャリア支援センターと支援構造を密にし、個に合った支援を行っており、就職・進学決定も早い段階で決まっている。</p>	<p>13年連続就職率100%であるが、今後入学者増員を目指すためには、就職の質を上げていくことや、学生の希望に沿った就職先への道を拓くことが課題となる。特に2015年度は公務員の希望者が多く、受験者数も増加傾向にあるため、公務員対策講座の受講を勧め更に合格者を増やしていきたい。そのため学生の就職・進学希望先を丁寧にリサーチし、キャリア支援センターと学科が協力し合い最終目標の達成への支援が必要となる。</p> <p>また、専門職以外の就職希望者へは早い段階から学内外の企業説明会の案内を告知し、個に合った就職先を見つけていくことが課題となる。</p>	
5 受験生に対する受け入れ方針の明確化	・学科教員の高校訪問	<p>学科教員が1名4～5校を担当し、前後期の2回に分けて、入試広報課員とともに高校を訪問した。前期訪問時(6月)には訪問高校の出身在学生の短大生活や進路(就職)の状況を伝えるとともに、本学で学ぶことの意義、就職先について具体的に説明することができた。進路指導の教員と意見交換することで、その年の変化や情報をリアルタイムで得る機会となった。また本年は新たな試みとしてポスター形式で「在学生からのメッセージ」を作成、進路指導室前等への掲示を依頼した。</p>	<p>高校側、教員、入試広報課とのスケジュール調整が困難なため、より多くの高校へ足を運ぶことが難しいこと。また、高校側の煩雑さを考えると、他学科の訪問との関係から訪問時期、回数等の調整が検討課題となる。</p>	

<p>・出前授業</p>	<p>出前授業は受験生受入れの初期段階として重要である。高校内での開催により、進路決定の手段としてより多くの高校生が体験できる利点がある。年々、高校との信頼関係が深まり、本学科指名数が増加の傾向にある。短大教員による授業は、入学後必要とされる学習力を示す機会でもあり、新入生の初年次教育の先駆けとして有効である。次の段階として、オープンキャンパスなど学びの場へ足を運び、短大での学びの心構えを深めることができる。このような段階的啓蒙は、保育者養成課程への滑らかな移行として有効である。</p>	<p>出前講座は高校主宰であり、年度初めに年間計画が立たないため、教員や短大行事等のスケジュール調整が困難である。講義演習の体験のほか、受講生との質疑応答の時間があるとよい。また、出前授業から進路説明会、オープンキャンパスへの進展も検証できるとよい。</p>	
<p>・高大連携科目</p>	<p>高大連携事業として、済美高等学校の高校生を対象として実施した。本年は昨年より3名参加者が増加し、2、3年生あわせて44名あった。昨年同様、入学後、本科目は大学の単位として認定される。本年は受講者以外にプロムナードコンサート鑑賞に参加を呼びかけて、本科目受講生以外に50名ほどの参加があった。</p>	<p>現在、学内のみで講義を実施しているところへ高校生が参加する形となっているが、今後は済美高校へ教員が出向き、講座を開催することを高校と協議、実施する予定である。</p>	
<p>・高校生向け講座</p>	<p>本年度の講座は、高校生の入学前調査での不安科目である実技2教科（音楽と造形）を7月29日に開講した。高校1～3年生が受講しており、高校生にとって入学前に学んでおくことの導入や、不安解決策提供の機会にできた。大学生生活の早期準備の提示が可能で、入学前教育と位置付けることができる。また、この2科目は、個別対応が可能で、能力に合った学習法が提供できている。</p>	<p>7月末の開講であったが、昨年8月実施と比べ若干参加人数が増えたものの、やはり、高校にとってこの時期（夏休み前半）は他の行事と重なり参加人数が少なかった。内容の面では、音楽、造形、身体表現を取り入れた遊びとしての表現活動として1本化することも考えられる。また、平日のメリットを生かし、附属幼稚園や児童センターの子どもたちとの触れ合いなども企画に加えることで、オープンキャンパスとの差別化を図りたい。</p>	

基準Ⅲ 教育資源と財的資源				
A 人的資源				
1 教育課程編成・実施の方針に基づく教員組織の整備				
2 教育課程編成・実施の方針に基づく教育研究活動	・教員研修の充実	<p>保育者養成に関する情報を共有するために、保育士養成協議会全国セミナー（2名）、中部ブロックセミナー（1名）、同会研修会（2名）に代表者が参加した。</p> <p>学外競争研究資金については1名が研究代表者として、1名が研究分担者として科学研究費助成金を受託している。その他、学内特別研究費に1件が採択され、1年間の研究に取り組んできた。それぞれ、成果発表を準備している状況である。研究活動には全教員が積極的に取り組もうとする態勢がある。</p>	<p>2018年度の保育士養成協議会セミナーが、岐阜地区で開催される。開催に先立ち、2015年度は2名の教員が全国セミナーに参加した。2016・2017年度には2015年度参加者以外の教員・全員が、全国セミナーに参加できるように工夫したい。また、東海圏での大学間連携も考慮しつつ、中部ブロックセミナーにも参加協力するよう、一層努力したい。</p> <p>2016年度科学研究費への挑戦については、研究代表者として8件、専任教員全員が応募している。今後、幅広く外部研究資金獲得に挑戦するよう、各教員の積極性に期待したい。</p>	
3 学習成果を向上させる事務組織の整備				
4 人事管理				
B 物的資源				
1 校地・校舎・設備等の整備				
2 施設設備の維持管理				
C 技術的資源等その他教育資源				
1 学習成果を獲得させるための技術的資源の整備				

D 財的資源				
1 財的資源の適切な管理				
2 財政上の安定確保の計画策定と管理				
IV リーダーシップとガバナンス				
A 理事長のガバナンス				
1 学校法人の管理運営体制確立				
B 学長のリーダーシップ				
1 教授会等の教学運営体制の確立				
C ガバナンス				
1 監事による業務の適切性				
2 評議員会の活動運営の適切性				
3 ガバナンス機能の適切性				
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携活動 	<p>長良川鉄道との地域連携である「あそびスター」トレイン」、郡上市との連携活動である「ぐじょうファミリーフェスタ」、関市との連携活動である「SEKIいきいきフェスタ」を実施した。「あそびスター」トレイン」、「ぐじょうファミリーフェスタ」においては、「学生による地域貢献事業助成」を受けており、年間を通して計画的な活動が行われた。「あそびスター」トレイン」においては、6年目の活動ということもあり、学生の成長に伴い活動内容のレベルが向上している。また、参加希望学生も多く、計画的に事前準備も進めることができた。</p>	<p>「ぐじょうファミリーフェスタ」については、郡上市の子育て課題への対応を視野に入れたイベントを展開することができ、高い評価を得ることができた。しかし、本学科の郡上市出身学生が減少しているため、今後どのように継続的に取り組んでいくか検討が必要と思われる。さらに今後、「SEKIいきいきフェスタ」の継続的な活動に期待したい。</p>	

2015年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)				
短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
基準Ⅱ 教育課程と学生支援				
A 教育課程				
2 教育課程編成・実施の方針	・効果的な教育への取り組み	<p>2014年度に準備を整えた、授業・学習支援のための独自の学習管理機能・システムを備えたMoodleを活用し、2015年度前期開講演習科目「リラクゼーションケア」（担当教員：社会福祉学科 教授 横山さつき）において、履修者が授業時間外に毎回の演習授業の練習する技術の予習・復習を仕組みを整え、実施をした。これにより、学生は授業授業時間外での効果的な自己学習の結果をえることができた。また「介護福祉士国家試験対策講座」では、分野ごとに100問の問題を作成し、それを学生が授業時間外にインターネットからサーバーにアクセスして、自己学習ができる体制を整え、実施した。また、模擬試験の結果を3段階にわけ、成績の悪い学生のみ少人数で集中的に試験対策講座を実施をおこなった。これにより、模擬試験では2回目の成績や共通試験での結果より、学生の成績向上が確認された。</p>	<p>Moodleを用いた授業改善の取り組みが、一部の教員の一部の演習科目での取り組みに留まっている現状にある。そのため、Moodleの活用した科目では、自己学習につながる効果が確認されているため、他の科目でも導入をすすめていき、学生が積極的な自己学習につながるができるか検証をおこなう必要がある。また、国家試験対策では、成績上位者はMoodleにアクセスし、問題に取り組んでいるが、特に成績が悪い学生はアクセス数が少ない状況にあった。そのため全ての学生が自己学習に取り組むことができるよう、学生への呼びかけなどの検討が必要である。</p>	

<p>・実習施設等との連携推進による効果的な実習教育と学生の実習満足度の向上を目指す。</p>	<p>今年度、実習段階ごとに介護実習内容と評価基準を明確にし、評価表を新たにした。今年度の実習指導者教育研修会において、評価表の達成度を詳細に示し、評価基準を標準化できるように実習担当者間で共通認識を図った。学校での実習指導の一環として、1年次の最初の介護実習に行く前に、実習激励会を開催し実習への不安解消と意欲的に実習に迎えらるよう学科教員と2年生と共に激励をした。また、多様な介護ニーズに対応できるように、高齢者グループホームを2施設取り入れた。介護実習を通して、課題が残された学生に対しては、再実習の機会を設けて施設実習担当者の協力を得ながら個別指導を行った。その結果、介護実習の評価は合格点に達した。</p>	<p>1年次の介護基礎実習において高齢者グループホームでの実習を試行的に2施設取り入れ配属したが、全ての学生が高齢者グループホームで実習体験できるわけではない。今後は益々在宅介護サービスのニーズが増すことが予測できるが、デイサービスセンターなどの在宅サービス実習も一部の学生しか実習体験ができていない。今後の課題として、全ての学生が施設サービス以外の多様な施設での実習配属ができるように考えていきたい。</p>	
<p>・医療的ケア導入に向けた取り組み</p>	<p>医療的ケアの基本研修部分の十分な指導体制を確立するために、これまでに中部学院大学看護リハビリテーション学部看護学科の専任教員（看護師資格をもつ教員）6名に指導資格を取得するための介護職員等による喀痰吸引研修を受講してもらった。学生5名に1名の指導者がついて技術指導することが効果的・効率的な教育につながると推察されるため、さらなる指導者養成を行い、今年度は2014年度入学生（2年次生）49名に対して10名の指導者による授業を実施することができた。その結果、49名全員が基準を満たし単位修得（授業科目名「医療的ケアA」「医療的ケアB」「医療的ケアC」、合計45コマ4単位）に至った。</p>	<p>2015年度は中部学院大学看護リハビリテーション学部看護学科学と短期大学部社会福祉学科の教員10名によって技術教育を実施することができた。しかし来年度からは看護学科の教員が所属学科の看護師教育に専念する必要があるため、新たに少なくとも8名の指導者を外部機関から確保しなければならない状況となった。学生の個性を踏まえた教育を行うことのできる有資格者の確保が課題である。加えて、2015年度の技術教育（演習授業）は集中講義で土曜日に開講した。学生及び教員の生活サイクルを鑑み、通常開講することが望ましい。</p>	

	<p>・新コース導入に向けた取り組み</p>	<p>2016年度より、社会福祉学科の介護福祉士取得をしない学生の履修モデルとして新たに「美デザイコース」を設け、「介護福祉コース」と合わせ2つのコースを置くこととした。特に新コースでは、人生を豊かにすることの支援を幅広くとらえ、化粧や健康などの関連技術のほか、進路を自ら考え切り開く就業力をサポートする科目として「有給インターンシップ」を教育内に位置づけ、個々のキャリアサポートに取り組むこととしている。検討にあたっては、学科以外の教職員も含めたワーキンググループで、新たな発想から議論をすすめている。また、新コースの検討が既存の「介護福祉コース」の科目や学習の充実につながるよう、選択科目の検討も行った。</p>	<p>新コースの開設は、学長のリーダーシップのもとにワーキンググループが中核となり取り組んだが、想定される学生のニーズにかなうカリキュラム編成や、有給インターンシップなど新たな教育方法の導入にあたり、科目の設定や担当教員の配置、関連業種との調整等の取り組みが必要となった。また、コースの中心となり実際の指導に取り組む教員の役割と分担も、学生の状況によって柔軟に調整していく必要がある、今後の検討課題となっている。</p>	
	<p>国際交流活動の実施</p>	<p>介護現場が様々な意味で多様化・国際化しつつある現在、学生時代に広い視野を養うために熱意をもって行っている本学科の国際交流活動は必ずや社会に貢献できるものとなることを確信する。</p> <p>2015年度の社会福祉学科としての国際交流は、以下の2点において行われた。</p> <p>1. フィリピン・ミンダナオ国際大学（MKD）との交流・研修</p> <p>毎年実施してきた全学対象の海外研修「ミンダナオ国際大学（MKD）との交流・研修」は、2015年度はダバオ近郊で発生した外国人誘拐事件の影響で休止せざるを得なかった。しかしながら、教員3名がMKDを訪問して、介護技術のワークショップを2日間にわたって開催した。ワークショップの講師は高野准教授が務め、大変好評であった。</p> <p>また、学科長 吉川教授がMKDのマリヤリ学長と会談し、今後の交流活動の推進、特にMKDの学生の本学への留学の道筋について話し合った。</p> <p>前年度実施したようにMKDの社会福祉学科4年生2名が本学に短期留学する予定であったが、旅券の発行が間に合わず、次年度に持ち越された。</p> <p>2. 特別講義「アジアの保健・福祉を学ぶ」（第7回）</p> <p>10月15日の3限に1, 2年生合同ゼミナールとして「アジア保健研修所</p>	<p>ミンダナオ国際大学との交流を双方向のものとして継続させるために、参加学生（双方）のための奨学金（外部資金）獲得のためにさらに努めたい。</p> <p>また、先方からの学生・教員の受け入れのための手続きは十分に時間的余裕をもって進める必要性を改めて認識した。</p> <p>「介護福祉士」を専門職として認めて、日本の養成校を卒業した外国人に就労ビザを発給する政策が導入されたならば、MKDとの交流事業も新しい段階に入るであろう。従って、留学生の受け入れについて検討を加え、具体案の策定することが新年度の課題となる。</p>	

3 入学者受け入れの方針				
4 学習成果の査定	<ul style="list-style-type: none"> ・達成度評価の検討 	<p>2014年度実施の介護技術到達度調査の結果を踏まえ、介護実習における評価尺度を完成し、2015年度入学生より学生個人の評価ファイルを作成した。これを毎回の介護実習終了後、作成された評価尺度に自己評価を記入することで、学生自身の達成度や成長の経緯を評価できる体制を整えた。これにより、毎回の介護実習で、自らの課題を自分自身で確認することができ、次回の実習で具体的な課題意識を持って望むことに繋がると期待される。さらに実習終了後には、目標に対してどの程度達成できたのかを確認することで、今後の授業や実習での前向きな取り組みが期待される。</p>	<p>学生が成功体験を重ねて達成感や満足感を得、介護実践のやりがいを感じながら学習意欲を高めていけることを目指した評価尺度であるが、2015年度入学生より実施を開始しているため、実践評価は出来ていない。そのため、同取り組みを継続していく中で、随時評価を行いながら評価尺度を完成させ、介護福祉士養成課程卒業時の到達目標をより明確にしていく必要がある。</p>	
5 学生の卒業後評価	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業生の把握と同窓会の組織化（介護事業所への調査を含む） 	<p>2015年に行った卒業生が就職した施設への調査（本学科を卒業した職員および介護福祉士教育の内容についての評価および意見等の把握）の結果を、報告書にまとめ、実習受け入れ施設等に配布する。また、岐阜県の補助金を得て、本学を卒業し介護現場で働いている職員の交流および研鑽の場を提供するために、「介護現場で活躍している卒業生」交流会を2回開催し、大勢の卒業生が参加した。</p>	<p>「介護現場で活躍している卒業生」交流会は、単に同窓会ではなく、会を重ねていくなかで、介護現場のさまざまな話題を語り合い、課題を検討し認識を深め、資質を高めていくことも視野にいれている。今後も定期的開催し、会の定着・発展を図っていきたい。</p>	

B 学生支援				
1 学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用	・FD活動への取り組み(授業改善に向けた取り組み)	<p>2015年度も前年度に引き続き、学科ごとではなく中部学院大学短期大学部全体でFD活動に取り組んだ。</p> <p>今年度は新たな試みとして、①FD委員による外部機関でのFD研修への参加(9月2日に2名、9月4日に2名が参加した。詳細については添付資料の報告書参照)、②教員相互の授業参観(全教員が前期中に少なくとも2回の授業参観を行って報告書を提出した)、③Moodleを活用したeラーニングの導入に向けた研究及び学習会の開催(10月28日)を行うことができ、活動が活発化した。</p> <p>また、前年度に引き続いて、④講演会(多様な学生に授業を通していかに関わるかを学ぶことを目的としたカウンセラーによる講演会)を7月29日に開催するとともに、⑤アクティブラーニングに活用できる技術に関する学習会(グループワークの手法に関する体験学習)を3月16日に開催した。</p>	<p>これまでのFD活動が1回完結型の内容で実施されることが多かったことから、FDでの学びと日頃の教育活動が連動し、継続的な学びとなるようなFD研修となるような計画を立案していく必要がある。このことは前年度に引き続いた課題であり、早急に検討する必要がある。</p> <p>FDとSDとの連動・協働に向け検討会を開催したが実施には至らなかった。そのため、来年度は実施に向け方策を具体化する必要がある。</p>	別添資料1: 外部機関でのFD研修報告書
2 学習成果獲得に向けた組織的学習支援	・入学時の学習適応への支援(基礎ゼミの活動、宿泊研修、その他)初年次教育	<p>入学時の学習適応に向けた支援については、オリエンテーションを皮切りに各科目の中でも取り組むが、主とした取り組みは今年度も「基礎ゼミナール」を中心に進めている。昨年度と同様に、ゼミ担当教員と学生の適合性を考慮し合同学習の機会を多く設けたが、学生の多様な相談を受け止めるといふ点では効果があったと思われる。</p> <p>宿泊研修は、これも例年通り白川村で1泊2日の日程で実施したが、村内交流も含めて村側との連携がすすみ、観光とは異なる住民や村内の活動に触れるプログラムを通して学生の多様な力を垣間見る機会となった。これらを基礎にして、その後の書く力、まとめ発表する力の学習の土台となっている。特に書く力については、ゼミ合同で、基礎学習として文章作法や新聞記事の要約方法を具体的な学習し、後期ではレポート作成のプログラムを実施している。このことについては、実施後にアンケートを実施し、プログラム実施上の成果と課題をあきらかにしている。</p>	<p>今年度は、学生の中でSNSを使った人間関係のトラブルが生じ、基礎ゼミ教員を中心に聞き取りや事後指導にあたった。本学科は、社会人も多く学び、学生層が多様性を持つため、学生関係の調整や支援に対する役割を基礎ゼミ担当教員がもつことが多い。今後、教員研修や大学全体の学生支援体制との連携を視野に入れ、さらに力量を高めていく必要がある。また、基礎ゼミでの「書く指導」では、基礎学習力が特に低い学生が出てきており、入学時から学生の書く力を評価し、その後の指導につなげていくことが必要になっている。</p>	

	<p>・国家試験対策</p>	<p>卒業時共通試験の全員合格をめざし、介護福祉士全国統一模擬試験を2回（基礎編・実力編）実施した。1回目の模試の結果、6割取れない学生は全体の約6割であった。6割取れていない学生を対象に、3学科（中部学院大学の介護支援コースと中部学院大学短期大学部専攻科、社会福祉学科）の介護教員が集中講義形式で修得度別対策講座を合同実施。その結果、2回目の模試の結果、6割取れていない学生は約4割となった。その約4割の学生を対象に学科教員が科目別に共通試験対策を行った。さらに、今年度新たな取り組みとして、3学科合同の国家試験対策（3学科合同での模擬試験の実施）、Moodleを利用したeラーニングによる学習システムを活用した。Moodleの活用については、自主的に学習を進められるようにした。</p>	<p>次年度は、共通試験日が例年の2月から12月に時期が早まる。そのため、共通試験の日程に合わせて模擬試験日を設定する必要がある。</p>	<p>別添資料2: 2015年度全国介護福祉士模擬試験結果</p>
<p>3 学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援</p>	<p>学生生活支援の取り組み</p>	<p>全学的に社会福祉学科の学生相談件数の割合が高く、知的発達障がいや学習障がいを強く疑う学生が増えてきている。そのため、そのような学生の学修支援や就職支援に向けての調整役を看護師・保健師・養護教諭等の資格を併せ持つ専任教員が担う体制を取った。 その結果、岐阜労働局岐阜公共職業安定所就職支援ナビゲーターや厚生労働省岐阜労働局ハローワーク関の学卒ジョブサポーター等の外部機関、及び学内機関（保健室看護師、学生課・キャリア支援センター・学生支援室の職員、カウンセラー）と協働した早期からの支援を行うことができ、就労移行支援事業等につなげることができた。</p>	<p>カウンセラーによる簡易テスト等によって知的障がいを懸念する学生が数名存在する。しかし、これまでに医療機関や相談機関にかかることなく、また、特別クラスや特別支援学校に通うことなく、保護者の保護の基に何とか普通学級で教育を受けてきた短大生は、療育手帳の対象者から除外されるため、卒業後の就職が非常に難しい。 したがって、入学してからの学生のフォローも重要であるが、入学させることが学生の将来の選択の幅を狭めることになりかねないことも踏まえ、入学時の選抜を慎重に行う必要がある。 職業訓練生が半数を占める現状において、社会人学生と現役学生間のトラブルからくる学生相談が多数あった。そのため、入学時に行っているレクチャー（社会人学生への現役学生との関わり方や学生としてのふるまい等についてのレクチャー）を充実させる必要がある。</p>	

4 進路支援	就職率100%に向けた取り組み	2014年度卒業生も、就職希望者はすべて就職先が決まり、そのうち95%が介護・福祉職に就いている。卒業後の進路に関してはゼミ担当教員が主となり、学科教員全員とキャリア支援センターが学生ひとり1人の希望を受け止めながら個別に支援を展開している。卒後の進路選択に向けて入学時より全体への働きかけまた個別への対応を開始しているが、年度により介護の求人・採用の出足がおそく、内定も遅れるという傾向も見られた。	毎年、数名の学生が、希望どする就職先に就労できなかったり、さまざまな事情により就労を保留している。就労に向け個別に課題を抱えた学生への早期からの支援をどうすすめるかという課題も浮かび上がっており、キャリア支援センター・各ゼミ担当の教員による柔軟な対応が求められている。	別添資料3: 2015年度(2016年度卒業)進路状況
5 受験生に対する受け入れ方針の明確化	・ 高大連携講座	連携協定を結んでいる高校を対象に介護講座を実施した。今年度は、昨年に引き続き、関有知高校との連携強化を図った。具体的な内容としては、関有知高校卒業の本学科2年の学生と教員が、関有知高校に訪問し、3年生対象に福祉教育の授業を行った。また、夏休み介護体験セミナーを利用し、関有知高校生(9名)と本学科2年生と共に、施設の高齢者を対象に音楽療法を実施した。また、山県高校の連携講座は、介護福祉をめざす高校生に対し福祉教育の模擬授業を本学介護実習室で実施した。このほか、県内及び愛知県の高校への出前講座を7回実施し、介護を目指す高校生や教員への具体的な説明をする機会を得た。	少数ではあるが、関有知高校から本学科介護福祉コースへの出願に結びついた。その一方で、高大連携を図っている高校生の中には、出願したいが経済的理由により介護施設への就職を希望する学生もいた。高大連携事業の成果として、福祉意識は高まったが大学進学には結びつかないケースを考えると、入試広報課と連携を図りながら高大連携事業を進めていくことを検討する必要がある。関有知高校との連携事業が更に定着したものとなるように工夫していくこと、そして、高校生と大学生が共同で研究課題を見つけられる活動にすることも事業活性化につながると考える。	
	・ オープンキャンパス	今年度のオープンキャンパスは、社会福祉学科に美・デザインコースが新設されることを受け、2コースに分けて実施した。介護福祉コースでは、学科教員が各専門分野の模擬授業を担当し、演習を交えながら福祉に興味・関心を抱いていただけるように楽しい授業を心がけて実施した。美・デザインコースにおいては、新コースの学びが明確に分かるように模擬授業に加え、模擬体験の二本立てで実施した。オープンキャンパス参加状況は、5月33名、7月34名、8月32名でこれらの月が最も人数が多かった。一番参加者の多い7月の参加人数を昨年度と比較すると、今年度は68名に倍増していた。次年度入学予定者は2月20日現在で37名であることから、各月にオープンキャンパスを実施することは意義深いことに加え、オープンキャンパス参加者が入試につながっていると考えられる。新設の美・デザインコースについては、毎回のオープンキャンパスに概ね15名程度の参加者で、次年度入学予定者が19名であることから、確実に出願につながったと考えられる。	介護福祉を目指す学生数が全国的に減少の傾向ではあるが、確実に日本の高齢者介護ニーズは高くなる一方であることから、より多くの高校生がオープンキャンパスに参加してもらい、福祉教育の啓蒙を含めて興味深い内容を取り入れていく必要がある。今年度のオープンキャンパスでは社福全体で、のべ126名が参加。3年生の参加者は、のべ84名。参加者全員が出願に繋がっているわけではないため、出願しなかった高校生がどのような進路を選択したのか、また、その進路を選択した理由を把握し、課題は何かを分析し検討する必要がある。	別添資料4: 第6回入試広報委員会 資料P25～32参照

	<p>・多媒体での広報</p>	<p>本学ホームページは行事や授業、ゼミ活動などの活躍が新聞やテレビ放映された内容を、即、ホームページで取り上げられるように努力した。高校訪問は過去の入学者の統計から重点校を決め、教員が分担をして年3回訪問し、学科での取り組みについて進路指導担当教員に伝えた。また8月には中・高校生を対象として、介護体験セミナーを6つの介護施設を会場として開催し、短大教員と施設担当者と共に中・高校生の体験の機会とした。さらに、3月の職業訓練生募集に関連し、1月下旬には岐阜市・関市・美濃加茂市に募集チラシを配布した。広報に当たり、岐阜市、関市、大垣市、美濃加茂市、多治見市、一宮市のハローワークに出向き、職業訓練制度の詳細について窓口担当者に直接説明を行った。その他、マスコミに働きかけを行い、岐阜新聞に折り込みちらしを挟み岐阜県内に広報した。また、リビング新聞社のタウン誌を活用し、愛知県内に職業訓練制度の募集案内を掲載した。</p>	<p>介護体験セミナーは、今年度は高校生に加え中学生を対象に加えた。中学生への広報は、会場施設（あかつき）に近い小金田中学校長を訪ね、参加生徒の呼びかけを依頼した。結果、中学生4名の参加があった。高校生は19名の参加であった。次年度は、中学校の広報の地域を広げ、早い段階から広報の方法を検討していく必要がある。また、職業訓練生募集チラシの配布については、チラシの制作時期が遅くなってしまった。そのため、次年度は、早めにチラシの制作に取り掛かり配布地域の手配を行う必要がある。</p>	
	<p>・介護の日</p>	<p>11月11日の「介護の日」啓発活動を2009年度から学外にて行っている。2015年度は11月3日に本学各務原キャンパスと各務原市との共催で開催される「学びの森フェスティバル」において、介護の日PR活動と介護に携わっている方に対して感謝の気持ちを込めたバラの花を手渡した。これまでは岐阜市柳ヶ瀬商店街、岐阜駅前等でPR活動とバラのプレゼントを行ってきた。例年より足をとめて学生と話してくださる方が多く、学生に話しかけてくださる方もおられた。今年度は天候にも恵まれたが「この場でゆったり過ごす」ために来ている人たちが多い会場であることが昨年までとは大きな違いとなったと考えられる。活動前に学生キャラバン隊を編成し、岐阜新聞・中日新聞・NHK岐阜放送局を事前訪問し、活動のアピールをおこなった。これにより、各新聞やインターネット上で取り上げられている。</p>	<p>2009年度から継続して行っている活動であるため、地域の方々に対する認知度は上がっているといえる。しかし、昨年同様に介護福祉士会や社会福祉協議会などの活動との差別化を図ることで更なる広報に繋げていく必要がある。しかし、同取り組みは、授業の妨げにならないように、土日曜日で開催することが多いため、学生の負担が少なからず発生している。そのため、開催日や場所など、より効果的であると共に負担の少ない活動方法の検討が必要といえる。</p>	<p>別添資料5: 「介護の日」啓発活動 チラシ</p>

基準Ⅲ 教育資源と財的資源				
A 人的資源				
2 教育課程編成・実施の方針に基づく教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> ・教員研修 ・研究状況 	<p>2015年度は、日本介護福祉士養成施設協会（以下、介養協とする）東海北陸ブロック教員研修会を幹事校として9月26日（土）27日（日）に岐阜県大垣市で開催した。</p> <p>科学研究費助成事業は新規採択が2件（研究代表者1件、研究分担者1件）、継続が1件（研究代表者1件）、申請中が5件である。学内特別研究費助成については、交付が2件（いずれも奨励研究）、教育改革事業 交付が1件（継続、共同研究）、申請が3件（共同研究2件、奨励研究1件）である。</p>	<p>本年度は、学科教員全員が競争的的外部資金（科研費助成）に申請を行なった。学生に対して質の高い教育を提供するためにも、一層の教員が研究に取り組むことができる環境づくりと意識の醸成が必要である。</p>	<p>別添資料6: 2015年度研究費採択状況</p>
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携活動の推進 	<p>大学所在地である向山団地自治会をはじめ、大学が連携協定を取り結んでいる自治体や福祉施設と密接にかかわりながら教育活動を展開している。以下の積み重ねの結果「地元に近い中部学院大学短期大学部」として知名度と信頼が高まり、学生の就職活動に多いに役立っている。</p> <p>具体的には、①向山長寿会のみなさんと学科1年生によるグランドゴルフ交流会の開催、②介護技術実技授業に向山長寿会のみなさんを迎えて実施、③入学時宿泊研修の村内各地での交流活動を白川村役場と住民のみなさんの協力により実施、④飛騨地区福祉の仕事相談会の実施、⑤関市内グループホーム大運動会 などである。</p>	<p>活動先となっているのは、学科教員が研究活動で関わってきた自治体や福祉施設が中心である。年を重ねるごとに「社会福祉学科」と活動先との関係が構築できつつある。今後は、企画準備段階から実施に至るプロセスにおいて学生の積極的参画を促し、地域社会の方たちと交流が進むよう工夫する必要がある。</p>	<p>別添資料7: 2015年度飛騨地区福祉の仕事相談会のチラシ</p> <p>別添資料8: 2015年度入学時宿泊研修村内交流活動</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・卒後教育（介護福祉セミナー） 	<p>第15回の「介護福祉セミナー」を2016年3月に開催した。「介護現場に元気とパワーと新たな技術を！」というテーマのもと、NHKでおなじみの秦万里子氏のコンサート、介護関係者による実践報告およびワークショップと、盛りだくさんの内容であった。介護現場での新たな技術やノウハウについて実地で学ぶとともに、コンサートでは、参加者の悩みや思いが共有され、介護の意義が深められ、勇気づけられた。</p>	<p>セミナーの内容を、介護現場や関係者と協議して、充実させていく。開催の期日や内容、広告の方法を見直し、より広く、参加しやすく意義のあるセミナーになるように、委員会をつくって検討する。</p>	

	<ul style="list-style-type: none"> 卒業時共通試験 	<p>2016年2月に実施された卒業時共通試験では、受験者全員が合格し、介護福祉士を取得することができた。それにむけ、模擬試験および対策講座を重ねて行い、よい結果が得られた。</p>	<p>2016年度入学生より、介護福祉士取得を希望する学生は国家試験を受験し、合格せねばならない。そのための対策を万全に実施し、全員合格を目指す。</p>	
--	---	---	---	--